ARTS MANAGEMENT SEMINAR 2024 REPORT

令和５年度文化庁委託事業
劇場・音楽堂等基盤整備事業

全国劇場・音楽堂等職員
アートマネジメント研修会

報告書

令和６年３月

THE ASSOCIATION OF PUBLIC THEATERS AND HALLS IN JAPAN
公益社団法人全国公立文化施設協会

はじめに

「全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会」は、公益社団法人全国公立文化施設協会が文化庁から受託している「劇場・音楽堂等基盤整備事業」の中核をなす研修会で、劇場・音楽堂等の活性化や実演芸術の振興を支援するため、毎年実施しています。

当研修会は、文化行政から施設運営、事業実施に至るアートマネジメントに関する知識を体系的に習得するために、現下の課題に対応したさまざまな専門研修を実施することで、職員の皆さまの専門性の向上を図ってまいりました。

令和5年度の研修会は、昨年度に引き続き、オンライン配信と対面のワークショップを組み合わせて開催しました。オンラインプログラムの一部は公開収録を行い、参加者を交えた双方向的な講座を収録することができました。本報告書はその研修会の内容を取りまとめたものです。劇場・音楽堂等に関わる職員の皆さまが、それぞれの職場で職務を遂行するうえでご参考にしていただければ幸いです。

末筆ながら、研修会の実施にあたり、また本報告書の編集にあたりご協力いただきました講師、モデレーターをはじめとする関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

令和6年（2024年）3月
公益社団法人全国公立文化施設協会

目次

はじめに……1

開催概要……4

プログラム……5

オンライン配信プログラム

人材養成講座　舞台技術と安全管理 〜工夫から生まれる安全対策〜……8

講座１　近藤良平氏に聞く「埼玉回遊」と休館中の事業実施について……9

講座２　中小規模館でもできる「映画上映会」の可能性を考える……12

講座３　劇場・音楽堂等におけるハラスメント
〜予防のための基礎知識とケーススタディ〜……15

講座４　シリーズ「貸館を考える」〜先進事例に学ぶ貸館事業について〜……18

講座５　あなたの施設でできる、光熱費節約のヒント……21

公開フォーラム　劇場を開く、市民と繋がる、地域を創造する。
〜劇場のコーディネート機能を開拓する〜……24

ワークショップ

1　次世代リーダー養成プログラム……30

2　「広報の考え方の基本」〜ワークショップ……31

ご挨拶……33

参考資料……39

令和５年度文化庁委託事業 全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会 開催概要

事　業　名　令和５年度文化庁委託事業
「全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会」

事業の目的　劇場・音楽堂等の活性化、地域の文化芸術の振興を目的として、アートマネジメントに関する研修を体系的に実施することにより、専門性の向上と劇場・音楽堂等の活性化を支援する。

主　　催　文化庁・公益社団法人全国公立文化施設協会

開催期間　オンライン配信：令和６年２月１日（木）～３月17日（日）（～24日（日）まで延長）
（公開収録：令和５年10月31日（火））
ワークショップ１：令和６年２月14日（水）・15日（木）
ワークショップ２：令和６年２月20日（火）

会　　場　収録：東京都中小企業会館、品川動画配信スタジオ
ワークショップ：東京都中小企業会館

募集期間　オンライン配信：令和６年２月１日（木）～３月17日（日）（～24日（日）まで延長）
ワークショップ１：令和５年11月15日（水）～12月20日（水）
ワークショップ２：令和５年12月４日（月）～12月25日（月）

対　象　者　劇場・音楽堂等職員、地方自治体の文化芸術振興行政担当者、アートマネジメント教育関係者、学生、アートマネジメントに関心のある方、一般の方等

企画委員
木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会　アドバイザー
柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会　アドバイザー
鈴木 順子　（公財）東京都歴史文化財団　東京芸術劇場　副館長
水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会　コーディネーター

モデレーター
木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会　アドバイザー
柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会　アドバイザー
鈴木 順子　（公財）東京都歴史文化財団　東京芸術劇場　副館長
間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会　名誉アドバイザー
水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会　コーディネーター
矢作 勝義　（公社）全国公立文化施設協会　コーディネーター

（50音順）

プログラム

オンライン配信

● **［人材養成講座］　舞台技術と安全管理 ～工夫から生まれる安全対策～**
講師：伊藤 久幸　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

［人材養成講座　再配信］
■ **文化政策と劇場・音楽堂等**　（令和３年度配信）　講師：柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
■ **劇場・音楽堂等の事業、危機管理とリスク対応**　（令和3年度配信）　講師：間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー
■ **自治体文化政策と劇場・音楽堂等**　（令和4年度配信）　講師：中川 幾郎　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

● **近藤良平氏に聞く「埼玉回遊」と休館中の事業実施について**
講師：近藤 良平　振付家・ダンサー、コンドルズ主宰、彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督
進行：大堀 久美子　編集者、ライター

● **中小規模館でもできる「映画上映会」の可能性を考える**
講　　師：前原 美織　山口情報芸術センター［YCAM］学芸普及課 シネマキュレーター
モデレーター：木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

● **劇場・音楽堂等におけるハラスメント ～予防のための基礎知識とケーススタディ～**
講　　師：植松 侑子　舞台芸術制作者、上級ハラスメント対策アドバイザー（（一社）ハラスメント対策協会）
モデレーター：鈴木 順子　（公財）東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 副館長

● **シリーズ「貸館を考える」～先進事例に学ぶ貸館事業について～**
講　　師：生田 隆明　（公財）三重県文化振興事業団 三重県総合文化センター 施設利用サービスセンター 施設運営課 課長
モデレーター：間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

● **あなたの施設でできる、光熱費節約のヒント**
講　　師：長谷川 祥久　（有）香山建築研究所 代表取締役所長
　　南井 克夫　（株）環境エンジニアリング 代表取締役
モデレーター：矢作 勝義　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

● **［公開フォーラム］　劇場を開く、市民と繋がる、地域を創造する。 ～劇場のコーディネート機能を開拓する～**
▶はじめに
モデレーター：水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター
▶プログラム（1）市民主体の活動が可能性の限界を超えていく ～みの～れで育まれた住民と行政の共創～
講　　師：中本 正樹　小美玉市生活文化課 四季文化館みの～れ 館長補佐・事業統括
▶プログラム（2）釜ヶ崎芸術大学は誰もが表現者 ～社会包摂の表現の場づくりから地域へ～
講　　師：上田 假奈代　詩人、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表理事
▶プログラム（3）生きるためのそうぞうする力 ～地域社会に新しい変容を促す～
講　　師：藤 浩志　美術家、秋田市文化創造館 館長、秋田公立美術大学 教授
▶プログラム（4）クロストーク
講師・モデレーター全員

ワークショップ

● **［ワークショップ1］　次世代リーダー養成プログラム**
講師兼モデレーター：柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
ファシリテーター：大久保 充代（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター
　　木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
　　間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー
　　水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

● **［ワークショップ2］　「広報の考え方の基本」～ワークショップ**
講　　師：阿南 一徳　東京藝術大学 演奏藝術センター 准教授

プログラム報告

人材養成講座

舞台技術と安全管理 ～工夫から生まれる安全対策～

●講　　師　伊藤 久幸　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

伊藤 久幸氏

札幌文化芸術劇場の伊藤久幸氏より、舞台の安全管理と自館での安全対策などについて、「危険なこと」「禁止行為」「施設側で判断すること」の3つを軸に伺った。

「危険なこと」は、たとえばサーカス的な演出をすること、ワイヤーなどで重いものを吊り上げること、スノコ上での仕込みなどが該当する。それぞれについて留意するポイントが解説された。とりわけワイヤーの破断荷重や固定方法については、事故につながる危険をはらむため、細かく説明された。さらに舞台床の固定時に、釘と木ネジでは強度がどれくらい違うかなどについても映像によって解説された。

「禁止行為」は、舞台上で煙感知器が反応するほどのスモークを焚くことや、裸火・火薬を使うこと、焼き肉プレート等の家電製品を使うこと、などの特殊効果を指す。消防署への禁止行為解除の申請などについても説明された。

最後に、札幌文化芸術劇場ではどのような安全対策の取組をしているか、ショッピングカートを利用した幕の吊り替え作業など、ユニークな事例を含め紹介された。

伊藤氏は、舞台上の安全管理に関しては、施設側がしっかり考え「判断すること」が大事であり、そのために事前に備えておくことが重要だとする。各施設がつくった運用の工夫も、公文協のような大きな輪の中で集まっていけば、いずれ全国的なルールとして形成されていくのではないかと語る。

人材養成講座 再配信

- **文化政策と劇場・音楽堂等（令和３年度プログラム）**
  講師：柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
- **劇場・音楽堂等の事業、危機管理とリスク対応（令和３年度プログラム）**
  講師：間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー
- **自治体文化政策と劇場・音楽堂等（令和４年度プログラム）**
  講師：中川 幾郎　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

講座1

近藤良平氏に聞く「埼玉回遊」と休館中の事業実施について

●講　　師　近藤 良平　振付家・ダンサー、コンドルズ主宰、彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督

●進　　行　大堀 久美子　編集者、ライター

はじめに

近藤良平氏は、2022年4月に彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督に就任されましたが、その年の10月に、劇場の大規模改修工事が始まりました。休館を機に始まったプロジェクト「埼玉回遊」。劇場の外に飛び出し、埼玉県内の各地で多彩な文化を探索する本プロジェクトを中心に、近藤良平氏の活動と劇場についてお話を伺います。

人の営みをめぐる「埼玉回遊」

大堀 久美子氏

大堀　近藤さんは、ダンスカンパニー、コンドルズを主宰され、パフォーマンスや映像、人形劇など多彩な要素を用いた創作を展開していらっしゃいます。彩の国さいたま芸術劇場とは、もともとご縁があったのでしょうか。

近藤　2006年から毎年作品を作らせていただいていて、春の新作公演やハンドルズの活動など、かなり長い付き合いになります。

大堀　近藤さんは、彩の国さいたま芸術劇場芸術監督就任以前から、いろいろな場所に出かけて行き、作品を介して幅広い方と繋がることに意識的に取り組んできたようにお見受けします。

近藤 良平氏

近藤　僕たち自身で表現するだけでなく、観てくださる相手の表現を拾うような双方向のやりとりが、結果的に作品になっていくように思います。作品を観る人たちからもいただくものがあって創作が動き出す、そんな循環をつくっていきたいという気持ちは大きいです。

大堀　その意味では、芸術監督として公立の劇場と関わることは、その循環をつくるきっかけとして大きな機会を得たと言えるのではないでしょうか。

近藤　芸術監督になって、より地域と繋がりたい、入り込みたいという気持ちが強くなりました。就任してすぐに改修工事が始まることには戸惑いましたが、「頑張って外に出よう」と考えました。これまでの活動で、さまざまな地域を訪れるうち、初めて行くときは知らないことばかりでも、1回行ってみると次に繋がるきっかけがたくさん生まれるものだと実感しました。今回、埼玉で“自ら行く”機会を得た感じです。

大堀　芸術監督就任の際に“クロッシング”という大きな指針を立てられたそうですが、その意味をご説明いただけますか。

近藤　“クロッシング”とは混じり合うという意味で、美術、音楽、ダンス、演劇、そういったジャンルを超えて、演じる人も観ている人も、さらにはその場所や地域もクロスして広がることを目指しています。

大堀　休館中に取り組んでいらっしゃる事業、「埼玉回遊」についてもお話しいただけますか。

近藤　「埼玉回遊」は、埼玉にこんな場所があるんだ、こんなことをしている方たちがいるんだと気づいてもらうための“回遊”です。他薦により訪問先を公募し、県内各地のさまざまな文化活動（広義の“文化”）をしている方たちを訪ねています。たとえば、木遣（きやり）保存会です。江戸時代、建物を作るために支柱を立てたり木を打ち込むとき、木遣歌を歌いながら皆で力を合わせたんですね。現役のとび職の方が、木遣を後世へ伝えるために、集まって

練習をしています。その他、藍染め工場、足袋工場、車人形や面師といった伝統的な技や芸能だけでなく、チェンバロ工房、農園など、多くの場所を訪問しました。訪問してみると、文化、劇場、アートなどの括りでは予想がつかないこと、ものにたくさん出会います。そこにいる人、職業、表現はもちろんですが、工場の古い機械の音や、整然とした雰囲気、匂い、経過する時間も含め、すべてが舞台装置のようで、あらゆるところに創作のヒントがありました。

大堀　近藤さんにとっても劇場にとっても、今後のエネルギー源になりますね。

近藤　劇場のスタッフも一緒に訪問したり、写真を撮ったり映像で記録したりする側面も含めて、事業に落とし込んでいくことも大事だと思っています。

大堀　こういう記録は、地域の財産にもなりますね。

近藤　記録を並べることで見えてくるものもあります。また、回遊の形でまわったことで、埼玉には川が多く、川沿いにたくさん文化が生まれていることもわかりました。河川を通して、人も文化も繋がっています。土地を体感しながら巡るこのスタイルはとても面白いと思っています。

“表現”を持ち出して場をつくる

大堀　「埼玉回遊」では、特徴のある施設、仕事、文化を訪ねてまわっていらっしゃいますが、逆に、地域の方々と交流しつつ作品化していく、地域の新しい踊り「さいさい盆踊り」も作られています。

近藤　人がつどって踊るということ自体に意味があると思うんです。集まりというと、閉じられたもののようにイメージしますが、盆踊りは、開かれた集まりに向いている。ひとりだと恥ずかしくても、皆が踊っていたらちょっとやってみようかな、と思うものです。「さいさい盆踊り」は、小学校の運動会で踊ったり、地域の盆踊り好きな人のところへ出かけて踊っているうちに、だんだんみんな面白がってくれるようになりました。その場所場所でまた新しく踊ってくださって更新されていくんです。きっかけさえあれば、いい仕掛けは自然と育っていくものだと実感しています。

大堀　企業とのダンスプロジェクトである「彩の国さいたま芸術劇場×埼玉高速鉄道」も印象的でした。映像を拝見すると、ビシッと制服を着た鉄道職員の方々が、車両のそばなどさまざまな場所で踊っていらっしゃる。指差し確認など仕事の所作を取り入れているのもいいですね。皆さん、とても楽しそうです。

近藤　学生時代、ヒップホップダンスを踊っていましたという人もいるんですよ。不思議な歌も僕がオリジナルで作りました。こうしてひとつの映像になると、会社のホームページで繰り返し見られますし、電車内のモニターで映像が流れると、見た子どもがあーっと言って指差します。つい先日、車両基地のある浦和美園でお祭りがあって、駅員の制服を着てみんなと踊りました。動物園や町工場などさまざまな場所で同じようなダンスプロジェクトができる可能性があります。

大堀　次はどこでダンスが生まれるか、それだけで市民の方はワクワクしますね。

　また劇場の方では、大きなプロジェクトを進めていらっしゃると伺いました。近藤さんの前の芸術監督、故 蜷川幸雄さんは、「さいたまゴールド・シアター」と、「さいたまネクスト・シアター」という劇集団の活動を行っていました。近藤さんも新しいシアターグループを構想していらっしゃるということですが。

近藤　新シアターの準備として「出張！ワークショップ・アラカルト」という名前で、劇場の休館中に、埼玉地域にある市民会館などでワークショップを実施する事業を行っています。「埼玉回遊」とリンクするところもあるのですが、その場所に行って、ダンスや音楽などの創作活動を通じて新たな人たちと出会いたいと思っています。山間部に住んでいる方も遠方からたくさん車などで集まってくれます。

　先日は、盆踊りのダンスを作る、音楽を作る、飾り付ける、という3つのワークショップを実施して、それを最終的に合わせてフェスティバル（お祭り）にするということをしました。子どもたちも参加して、芝生の上に不思議なヤグラを作り、最後は生演奏の曲でみんなで踊りました。これはシアター構想に近いですね。

知らない人たちがまず集まってワークを重ねて、すごく重厚な芝居を作るかもしれないし、新しい音楽集団ができるかもしれない。もしかしたら新しい祭りが生まれるかもしれない。そういう場をつくるための構想が、今回ワークショップを通して少しだけ見えてきたかなと思います。

大堀　ワークショップを重ねて出会った人材は、劇場に所属する集団に育てていかれるのでしょうか。

近藤　蜷川さんのゴールド・シアターやネクスト・シアターとはまた異なるスタイルで、どうやって人が集まるのがいいかなと熟考しているところです。

大堀　まず集まる、その場があるということが大切で、そこから創造、クリエーション、表現になっていくという順で考えていらっしゃるんですね。劇場という、本来であればベース基地になるところがないからこそ、気づけることもたくさんありそうです。

近藤　ベースになる場所があるに越したことはないのですが、人は常に生活の中で動いているものなので、その中でふと集まれる場所があると面白いと思います。

大堀　公立文化施設が地域の方々と繋がる可能性についてですが、近藤さんのようなアーティストがいなければできないということはないですよね。

近藤　僕は自分が引っ張っている気持ちはあまりありません。「これって何だろう」とお互いに興味を持って対話をしていると、みんな「こうしようよ」と言ってくれます。外に出てみると知らないことばかりですが、それはみんな同じです。おじけることなく一歩踏み出してやってみる気持ちが、すごく大事だなと思っています。

講座2

中小規模館でもできる「映画上映会」の可能性を考える

● 講　　師　前原 美織　山口情報芸術センター［YCAM］学芸普及課 シネマキュレーター

● モデレーター　木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

はじめに

デジタルシネマとは、映画上映に必要な機材など映画上映の基礎的なことを学び、事業予算の少ない中小規模館でも「こうすればできる」というノウハウやホールを上映に適した環境にする工夫、集客の工夫を考えます。併せて、YCAMの先進的な事例を通して公共劇場で映画上映を行う意義についても深掘りします。

デジタル化が推進する映画上映会

木全 義男

木全 義男氏

さまざまな劇場を訪問しますと、予算がない、人がいないということでなかなか自主事業を企画できないという声を聞きます。一方、デジタル化が進むなか、映画の上映会は比較的簡単に計画できますので、施設の空き日程を活用した映画上映会の可能性を考えていただきたいと思います。

前提として映画上映の基礎知識をお話ししておきましょう。まず、上映会を開催するには、配給・上映権を持つ配給会社から作品を賃借する必要があります。映画は著作権などさまざまな権利で保護されていることを念頭に置かなければいけません。今映画は、DCP（デジタルシネマパッケージ）、DVDやBD、16ミリフィルム、35ミリフィルムの4つの素材で上映する可能性が高く、それぞれに対応した上映機材が必要になります。

現在は映画の制作から上映までの過程のほとんどがデジタル化していると言えます。デジタル化により映画の可能性は広がっているものの、1960年には全国に7,457あったスクリーンが、2022年には3,648スクリーンに減っており、人々がスクリーンで映画を観る機会が減っている現状があります。私が仕事をしている板橋区の大山地域でも、かつては商店街の中に7館あった映画館が今はすべてなくなってしまいました。「映画のまち」を復活させたいという思いで、商店街と協力しレトロシネマをフィルム映写する企画を2023年から始めたところです。

映画は、50年前に撮られたものもその当時のままで誰もが観ることができるというのが大きな特徴です。さらに皆で一緒に大きなスクリーンで鑑賞することで、共有体験ができるということも良い点です。ヨーロッパや韓国では、自国の映画を保護したり、シネコンでかかるようなメジャー作品以外の映画を観る機会を保障しており、公共上映的な活動が、映画鑑賞の多様性を保障している状況にあります。我が国でも、今回ご紹介する山口情報芸術センターを始め、川崎市アートセンターやせんだいメディアテークなど映像の先進的な取組をしている公立文化施設があります。

文化庁の文化芸術推進基本計画（第2期）では、日本映画の振興を図ることが位置づけられており、上映や映画祭などへの支援が行われています。日本芸術文化振興会でも上映に対する助成事業を行っています。デジタル化の進展により、身近な文化会館で多様な映画の上映ができる可能性が出てきましたので、そのようなことを皆さんと考えていきたいと思っています。

映画館のないまちで多彩な映画体験を
前原 美織

前原 美織氏

私のいる山口情報芸術センターは山口県山口市にあり、施設は通称YCAM（ワイカム）と呼ばれています。展示や公演ができる3つのスタジオに、図書館などを併設する複合文化施設ですが、本日はそのなかでもシネマ事業についてお話ししたいと思います。大きく分けて3つの取組を行っています。ワイカムシネマ、真夏の夜の星空上映会、YCAM爆音映画祭です。

ワイカムシネマは100席のスタジオで通年上映しています。当初は週末だけだったのですが、現在は休館日以外は毎日上映しています。きっかけとしては2012年に、山口市に1つだけ残っていた民間の映画館が閉館したことがあります。その映画館のまちの映画館という位置を引き継ぐ形で、アート系の作品を中心に、日本映画、世界各国の劇映画、ドキュメンタリー映画、時事ネタや人権、歴史などに関する特集上映も実施しています。

上映に合わせてトークイベントを行い、手話通訳、要約筆記を付け、今まで映画館に足を運ぶ機会がなかった方にも楽しんでいただけるようにしています。コロナ禍以降はオンラインでもトークイベントを開催するようになりました。

真夏の夜の星空上映会は、YCAMのシネマ事業のなかでも特に市民に開放された、お盆恒例の無料の屋外イベントです。2005年から続いており、8月の第2週目に3日間から4日間開催します。日本映画の上映が1日、アニメ作品の上映が1日、あとは高校生からシニア層までをターゲットにした洋画の上映をしています。上映の準備としては、はじめに音響設備を整えます。前にだけスピーカーを置くのではなく八方から音を出すことで、音楽やセリフが広い角度から聞こえるようにしています。 スクリーンは独自で枠を作ったものを壁に立てかけており、いずれも雨天の日は屋内にも設置できるようにしています。

次はYCAM爆音映画祭をご紹介します。2013年から毎年開催しているイベントで、8月の最終週の週末3日間から4日間、300席のスタジオで映画上映をしています。YCAMの高性能の音響機材、スピーカー約60台をセットアップして、大音量というだけでなく、自然音までリアルに聞こえる上映方法を取っています。

作品のラインナップは、全国の映画館で爆音映画祭を行っているboidの樋口泰人さんのご協力をいただき、幅広い作品を上映しています。また、音響スタッフもスピーカーの数や角度を工夫し、年々レベルアップしていくように心がけています。さらにバックステージツアーなども行い、上映の仕組みを知っていただき爆音映画祭の楽しみ方をもっと深めていこうというワークショップを開催しています。

そして、今年はセンター設立20周年を記念して、「Afternote山口市 映画館の歴史」という展覧会を開催しています。現在、山口市には映画館が1館もないのですが、過去に山口市内にあった映画館の歴史を巡りながら、地域の記憶とともに映像メディアの変貌を振り返る展覧会となっています。

クロストーク

木全　YCAMには映画上映するには羨ましい環境がありますが、もし普通の劇場で施設の空き日程を利用して1日で映画上映会をする場合、どのように環境を整えればいいでしょうか。

前原　まず映写する機材がない場合は、移動映写の会社が近くにあればそこを通じて上映してもらう方法があります。上映する素材も手配してもらえることがありますね。ただ公共施設が映画興行の方に入り込むことになりますので、都道府県の興行組合（全国興行生活衛生同業組合連合会）に企画書などを提出しておいた方が安全にできる

と思います。

文化的な作品でしたらのホームページに自主上映の窓口を設けている配給会社もあります。ただメジャー系のものとなると、映画館や地域にある興行組合を通さないと貸してくれない作品もあり、ひとつひとつ作品によって事情が違います。

木全　現在私が運営しているおおやまレトロシネマでは、深谷シネマという単館系映画館の支配人を通し、興行組合を通じて作品を借りています。機材はDCPの場合もフィルムの場合も、すべて移動映写の会社に持ってきてもらっています。文化施設には、空間があって、音響設備とスクリーンもありますから、移動映写の会社と組むことで、企画をつくっていくことが可能なのではないかと思います。ところでどれくらいの予算があれば上映素材を借りることができますか？

前原　上映回数や時期にもよりますが、1回5万円や10万円などと価格が決まっている作品もありますし、上映回数では価格が決まらない作品もあります。高くても20万円くらいではないでしょうか。それを回収しようとするとなかなか難しいかもしれないですけれども……。

木全　小さい映画祭にかけるような芸術作品だと、製作会社と直接交渉すれば比較的安く借りられる場合もあると思います。映画作品は本当に多様ですから、いろいろ工夫する余地はあるかなと思いますね。

前原　最近は地元で撮影した作品がすごくヒットする傾向があります。地元愛と映画に対する愛が重なるところがあるんですね。そういうものをまずやってみるのが今は旬なのかなと思っています。

木全　探してみると、地元出身の若い映画監督さんがいるはずです。なかなか発表機会がないと思うので、そういう方の作品を上映していくことも文化会館の使命として良いですね。

前原　そうですね。まずは地元を応援する作品がいいのではないかと思います。

木全　最近では、舞台芸術作品という生の舞台と映画がすごく接近してきた印象がありますね。昔なら舞台美術を作るところを今は映像で代替してしまうパターンも出てきましたし、コロナ禍を経て、公演を映像に録り、配信することは普通になりました。舞台芸術作品を8Kなどの高精細映像で撮影し上映すると、目の前で役者が演技をしているように観ることができますし、場合によっては映像の方が細かいところまで見えるということもあるでしょう。劇場で映像を上映するということは、本来のパフォーミングアーツの延長線上にあるような企画にもなってきています。映画上映会を開催する経験が、将来的には舞台芸術作品の上映にも繋がっていくのかなと思います。

劇場が自分たちだけでやろうとするとなかなか難しいと思いますが、地域の商店街やNPO、映画館に携わっている人など専門家を巻き込んでいくことで、どの地域でも映画上映会の実施は可能だと思います。

講座３

劇場・音楽堂等におけるハラスメント ～予防のための基礎知識とケーススタディ～

● 講　　師　植松 侑子　舞台芸術制作者、上級ハラスメント対策アドバイザー（(一社) ハラスメント対策協会）

● モデレーター　鈴木 順子　(公財) 東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 副館長

はじめに

2022年4月1日より、パワハラ防止法に基づき、事業主は職場におけるパワーハラスメント防止のための措置を講じることが義務化されました。まずは「ハラスメントとは何か」「どういったことがハラスメントにあたるのか」という基礎知識を身につけ、劇場・音楽堂等で起こり得るケースについて考えます。

鈴木　昨今、ハラスメントに対する意識を高めた行動が、すべての社会人に求められています。劇場の現場では、職員以外にも、委託会社のスタッフや、アーティスト、技術者などさまざまな人が関わり、その運営が成り立っています。本日は上級ハラスメント対策アドバイザーの植松侑子さんからハラスメントについて伺い、安全で快適な公共劇場運営の一助にしていただければと考えています。

鈴木 順子氏

ハラスメント防止の必要性
植松 侑子

2020年6月に大企業に対して義務化されたパワハラ防止法は、猶予期間を経て、2022年4月にすべての企業が適用対象となりました。このなかで、事業者の責務と同時に労働者の責務も明文化されています。事業主は事業主自身がハラスメント問題を発生させないことはもちろん、ハラスメント問題に対して労働者の関心と理解を深める配慮が求められます。一方、労働者はハラスメント問題に関する関心と理解を深め、研修など事業主の講ずる対策に協力することが求められます。

これから団塊の世代が後期高齢者になり、労働人口が不足する社会を迎えるなかで、人材を確保するうえでもハラスメント対策をはじめとした労働環境を整備することが非常に重要になってきます。

植松 侑子氏

ハラスメントの基礎知識

ハラスメントとは相手に不快感を与える嫌がらせやいじめ全般のことです。とりわけ属性（性別・年齢・職業・宗教・社会的出自・人種・民族・国籍・身体的特徴・セクシュアリティなど）や人格などに関する言動によって相手に不快感や不利益を与え、尊厳を傷つけることです。重要なのは、行為者の意図に関係なく、相手を不快にさせ傷つけられたと感じさせる発言や行動がハラスメントに該当するというのが、一般的な考え方です。しかし、ハラスメントになるかどうかの基準が相手にあるのなら、どこまでが教育・指導としてOKなのか、この線引きが難しいです。

たとえば、舞台上の仕込みの最中に集中して作業しておらず、安全性に危険があるスタッフに「危ないだろ、ちゃんとやれ！」と怒鳴ること、これは業務上必要がありハラスメントではないとみなされることが多いです。それに対して、その日以降もこのことを蒸し返し、日常的に暴言や威圧的な態度を繰り返した場合、パワハラ行為に該当す

る場合があります。

ハラスメントの予防を考えるとき、まったく問題にならない行動と、人を殴る蹴るなどの絶対にNGな行動の間にある「グレーゾーン」と呼ばれる部分が非常に重要です。ハラスメントはある日突然起こるのではなく、多くの場合、グレーゾーンの時期を経てエスカレートし、絶対NGな行動に至ってしまいます。このグレーゾーンの時期に、周囲の人が介入していれば、大ごとにならなかったというケースが多いです。

ハラスメントの種類

パワーハラスメント：厚生労働省は、職場のパワーハラスメントについて、以下の３つの要素をすべて満たすものとしています。①優越的な関係を背景にした言動であって、②業務上必要かつ相当な範囲を超えたものにより、③労働者の就業環境が害されること。なお、人によって感じ方の差があるため、当事者の訴えだけでなく、平均的な労働者の感じ方も鑑みて総合的に判断していくことになります。

また、具体的に６つの行為類型を挙げています。①身体的な攻撃（暴行・傷害）②精神的な攻撃（脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言）③人間関係からの切り離し（隔離・仲間はずし・無視）④過大な要求（業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制、仕事の妨害）⑤過小な要求（業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じることや仕事を与えないこと）⑥個の侵害（私的なことに過度に立ち入ること）としています。重要なことは、上司として部下を指導するのは任務としても、業務の適正な範囲を超えないように指導をする、人格や尊厳を侵害しない、ということです。

セクシャルハラスメント：セクシャルハラスメントの定義は、職場等においてその人の意に反する性的な言動が行われることです。 セクハラというと男性から女性のイメージが強いですが、当然女性から男性もありますし、同性同士もあります。被害を受ける方の性的指向や性自認に関わらず、性的な言動によって傷ついた場合や就労環境が害されている場合はセクシャルハラスメントに該当します。

モラル・ハラスメント：通称モラハラですが、これは精神的ないじめ、嫌がらせです。職場の上下関係に関わらず、言葉の暴力や陰口、人格の否定、無視する、仲間はずれにする、仕事の妨害、仕事上の各種の嫌がらせ、プライベートなことへの干渉などがこれに該当します。

SOGIハラスメント：SOGI（ソジ）というのは、「性的指向と性自認」のことで、どのような性の方を好きになるか、自分の性をどのように捉えているかを指します。SOGIハラスメントのなかにはアウティングという行為があることも知っておいていただきたいと思います。本人の同意なしにセクシュアリティに関することを周囲に暴露する行為で、アウティングの被害者が精神疾患となり自殺に至ったケースもあります。

すべてのハラスメントに関して重要なことは次の５点です。

- 言動に対する受け止め方には、個人間、立場等により差があり、ハラスメントにあたるか否かについては、受け手の判断が重要であること。
- 親しさや好意を表すつもりの言動であったとしても、本人の意図とは関係なく、相手を不快にさせてしまう場合があること。
- 不快に感じるか否かには個人差があるため、この程度のことは相手も許容するだろうという勝手な憶測をしないこと。（相手との良好な人間関係ができていると勝手な思いこみをしないこと。）
- 相手が拒否している、またはいやがっていることがわかった場合には、同じ言動を決して繰り返さないこと。
- 相手からの意思表示がない限りは差別やハラスメントにはあたらないわけではないということ。

ハラスメントをいかに防ぐか

職場環境でハラスメントを防止するには、次のことが必要になります。まず、この職場ではハラスメントは許しませんというトップの方針をきちんと伝えること。そして職員同士のコミュニケーションを図っていくこと。さらに職場を風通し良くすることも大切です。人間関係が固定化しがちな場合、インターンシップや市民ボランティアなど、外の風が入ってくるような取組を行うこともひとつの手だと思います。そして職場である以上、法律を遵守し、きちんと休憩休息、余裕を持って働くということです。また、ハラスメントが起こる要因には年代間の温度差もあるように思います。育ってきた時代の社会的な背景や受けてきた教育・指導は年代によって違うということを理解したうえで、リスペクトし合える関係性を構築することが理想です。ハラスメントとは、相手の価値観・感覚を認めず、相手を自分の思う価値観・感覚で支配・コントロールしたいという欲求から発生しがちです。

ハラスメントをなくすためにすぐに実践可能なことは、次の２点に尽きると思っています。１つは挨拶をすること。もう１つはありがとうをきちんと伝えること。最も大事なのは、やはり私たち自身の日々の行動です。いくら法律ができ、研修をして相談窓口をつくっても、人間関係が破綻していて挨拶もない、お互いを傷つけ合っているということであれば焼け石に水です。ハラスメントをめぐる課題で最も重要なのは、対等な人間として人権を尊重し合うこと。そして、価値観の違う人間同士だからこそ、対話を通じて相互理解を深めていただきたいと思います。

ケーススタディ

① 事業企画担当のリーダーＡと新人Ｂのやりとり

② 市民参加ミュージカルの出演者同士のトラブル

③ パワハラと思われる言動をする同僚Ａと、それを指導しない上司Ｂ

④ 新しく配属された上司Ｂに対して、無視したり業務に必要な情報を教えないベテラン職員Ａ

講座４

シリーズ「貸館を考える」～先進事例に学ぶ貸館事業について～

● 講　　師　生田 隆明　（公財）三重県文化振興事業団 三重県総合文化センター 施設利用サービスセンター 施設運営課 課長

● モデレーター　間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

はじめに

間瀬　全国公文協の令和４年度の調査によると、全国の公立の劇場・音楽堂等の91.7%が貸館事業を行っています。劇場法（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）では、劇場・音楽堂等の事業として「実演芸術の公演又は発表を行う者の利用に供すること」が挙げられていますが、これは貸館事業にもかかっているものと認識し、単なる場所貸しではなく、利用者サービスを工夫して戦略的に貸館を実行していくことが重要だと思います。本日は、三重県総合文化センターの先進事例をお聞きして、貸館事業の活性化について皆さんと考えていきたいと思います。

間瀬 勝一氏

貸館事業を“顧客志向”の事業へ
生田 隆明

生田 隆明氏

三重県総合文化センターには貸館事業を司る施設利用サービスセンターがあり、私はその運営課に所属しています。貸館施設は全部で29施設ございます。ホールが４つ、展示ギャラリーが２つ、屋外スペースが２つ、リハーサル室が２つ、そして会議室が大小織り混ぜて19ございます。

当センターでは指定管理者制度導入のタイミングで、貸館を管理主体の業務から顧客志向の事業へと、捉え方を大きくシフトチェンジしました。貸館事業に関する理念の１つとして、「信頼に応える充実のサービス・サポート」の取組についてまずお話しいたします。

ホール、屋外スペースを除くすべての会議室内にアメニティを設置しています。施設利用中のお客さまが困ったときに即座にあって嬉しいものを準備しています。具体的には、はさみ、テープ、マグネット、ボールペンやマーカー、A4用紙、荷物配送伝票（着払い用）などです。よく紛失や盗難の心配はありませんかと聞かれることがありますが、これまで大きなトラブルになった事例はありません。私たちは備品を配置するリスクよりも、かゆいところに手が届く利便性、いつでも備品が完備されているという安心感を重視しています。

次に有料のオプションサービスについてですが、現在６種類のメニューを展開しています。まず間接的なサービスとして弁当手配、装花手配、調律師手配などのサービスを行っています。イベント担当者の方からするとサービスの申し込みを含め支払いが一括で済むというのが大きなメリットになるようです。アウトソーシングしているサービスですので利益率そのものは低いのですが、とてもお客さまに喜ばれているサービスです。

また、直接的なサービスとして看板作成、会場設営の２つがございます。こちらは職員が直接対応しています。サービス開始にあたり、金額の設定や品質、どの程度のクオリティで実施するかなど、近隣の民間会社に配慮し民業圧迫にならない内容をこちらで設定して運営を続けています。会場設営については、文化団体等の高齢化などもあり徐々にニーズが拡大している印象です。

さらにコロナ禍で生まれたサービスに光高速通信サービスがございます。当センターでは10年以上前から公衆無線LAN、フリーWi-Fiの提供を行っていましたが、コロナ禍でさらに「配信」や「リモート」のニーズが高まったこ

とから光回線常設の施設を整備しました。令和3年4月から有料サービスを開始しています。こちらのサービスのポイントは、3つの部屋に限定して付設したことです。その3室はあえて利用率の低い施設を選びました。低利用施設への付加価値増大という名目でしたが、時宜を得たサービスであったことから現在も多くのお客さまにご利用いただいています。

また、現在、当センターでは貸出し施設の新たな増設や形質変更を多く実施しています。新規施設には、事業部門が倉庫や会議室として有していたスペースを活用しています。当時、お客さまからは5名から30名程度の小規模施設のニーズが多く、それを受けて40名規模の小研修室を2室と、セッションルームという6名定員の施設をつくり運用を開始しました。どの施設も年間で80%を超える高利用率施設になっています。

劇場を身近に感じてもらう取組

次に劇場を身近に感じてもらう取組をお話ししたいと思います。これは多くの施設で行っていらっしゃると思いますが、当センターでは主に小学校を対象に、普段は見られない舞台裏や楽屋を見学できる劇場見学を実施しています。これを、総務部門や事業部門ではなく、施設貸し出しを司る管理部門が担っているのが特徴です。劇場という商品の良いところ、アピールポイントを一番わかっている部門ですので、適任であると考えています。また劇場を自分たちの誇りに感じてもらえるように、響きが良いと定評のある大ホールでのクラシック CDの録音事業をスタートしました。国内のクラシック関連のレーベルにお声がけし、これまでに60枚近い作品がセンターのクレジット付きでリリースされています。

当センターで活躍するボランティア（県民）との良い関係性を築いている事例をご紹介します。複数あるボランティア活動の1つに楽器弾き込みボランティアというものがあります。楽器の熟成を重ね、その価値を高めるために年に数回、楽器の弾き込みをしていただいています。ボランティアにとっては、県のホールでスタインウェイやベーゼンドルファーといった名器を思う存分演奏でき、また、センターにとっては楽器のコンディションが保たれるという互恵関係が生まれています。さらにボランティアの方々にはインプレッションシートという奏者目線での簡単なレポートを毎回、提出いただいております。私たちはその内容を確認し、メンテナンス業者と共有して、年次の保守点検の際に役立てています。そうして熟成・整備された楽器が公演で使用され、観客（県民）の皆さまに素晴らしい音楽をお届けしています。

当館は、公共施設としては大変珍しいと思いますが、開館してからずっと来館者数が増え続けています。皆さまと同じくアンケートを実施していますが、利用率に比して回収率が低いことが大きな課題でした。以前は、アンケートは1種類でないといけないと思い込み、網羅的な内容のアンケート用紙を使っていましたが、アンケートの紙面をいろいろと工夫し、用途に合わせてデザインやレイアウトを変えてみました。見直しの結果 6種類のアンケート用紙ができ、実施しますとなんと10倍に回収率が増えました。こんな単純なことで、と思われるかと思いますが、その効果は大きく、アンケート回収数の増加に伴い要望や意見も多くいただきました。本当に小さなご意見も多いのですが、私たちの改善のアクションに繋がり、それが評価をいただくことで、取組の効果が感じられ、職員のモチベーション維持につながっていると考えています。

クロストーク

間瀬　まさに目から鱗という事例も多かったと思います。さまざまなアイデアを活かして貸館事業を行っていらっしゃいますが、当初はやっていたけれど、今は終了したような取組はありますか？ 他の施設にも参考になるかと思います。

生田　チケット作成サービスを行っていました。館の方でホールの座席表のデータなどは持っており事業部門もありますので、指定席のチケットを作ることは簡単にできました。しかし、紙で発行するサービスでしたので、昨今

のデジタルチケット化などの流れを受けてニーズが減り、終了させていただきました。

もう１つがフロントスタッフですね。レセプショニストの手配サービスを有料で行っていました。こちらは当初少しご利用はあったのですが、地域性もあるのかニーズがだんだん減っていき、終了いたしました。何事もやってみないとわからないので、やりながら考え、ダメなら即時撤退という形で、これまで試行錯誤を繰り返しています。

間瀬　部屋の増設や形質変更もやっておられますが、行政側との調整が必要だったかと思います。そこはいかがでしょうか？

生田　もともと三重県の第２期の指定管理業務の仕様書の中に「低利用施設の利用促進策」、「新規貸出施設の提案」を求める項目があります。これは長く指定管理業務を行うなかで、行政側が我々の取組を好意的に受けとめていただき、仕様書の中に入れていただいたものと思っています。それを受けて提案をして行っています。また、部屋の利用料を下げる（利用料金制の導入）などして利用率の向上に努めています。

間瀬　令和５年度から、茶室の利用向上プロジェクトを始動、とありますね。これはどのようなことを考えていらっしゃいますか？

生田　まだ立ち上げたばかりで、お話しできることも限られますが、部屋を茶室の機能を維持したまま茶会以外にも使えるようにしていったらどうかと考えています。和の空間ですので、たとえば和小物や陶芸品の展示、即売スペースなど。そのために展示用の棚を用意したり、部屋の照度を高めたりと試しているところです。

講座5　あなたの施設でできる、光熱費節約のヒント

● 講　　師　長谷川 祥久　(有) 香山建築研究所 代表取締役所長
南井 克夫　(株) 環境エンジニアリング 代表取締役

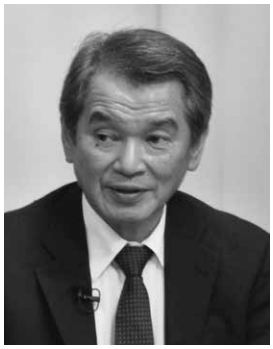
● モデレーター　矢作 勝義　(公社) 全国公立文化施設協会 コーディネーター

はじめに

各公立文化施設で喫緊の課題となっている光熱費の高騰。大きな削減は難しくても、何らかの工夫で数パーセントでも節約できないか。光熱費節約の可能性を考えます。

節電には“デマンド値”の計測が大切

矢作 勝義氏


南井 克夫氏

長谷川 祥久氏

矢作　近年、光熱費の高騰が公立文化施設に非常に大きな課題としてのしかかっています。この問題を解決できる可能性について今日は考えたいと思います。最初に電力料金の構造を南井さんから解説していただければと思います。

南井　電力料金は基本料金と従量料金の足し合わせで構成されています。基本料金は[基本料金単価×契約電力]、従量料金は[従量料金単価×使用電力量]で決まります。基本料金というのは電気を使っても使わなくても毎月必ず払っていかなければいけない料金です。その契約電力量がどのように決まるかというと、たとえば去年の8月に1時間あたり310kW使ったと仮定します。すると次の月からこの310kW×基本料金単価の金額が基本料金となり、次の年の7月いっぱいまではその基本料金を支払う必要があります。しかし、次の年の8月、仮に何らかの対策をとって契約電力が260kWになったとします。するとここで50kWの基本料金の節約が可能になります。東京電力の料金にあてはめると、毎月およそ9万円ほどの節約になります。これが12ヶ月続くので年間でおよそ100万円ぐらい節約できることになります。使用電力のピークをデマンド値*と言いますが、これを抑えることが電気料金削減のポイントになるということです。

(*デマンド値…電力会社との取引における「30分間(デマンド時限)における平均使用電力：kW(稼働負荷の平均容量)」のこと)

矢作　実際に電力のピークを抑えるためには、どのようなことができるでしょうか？

南井　消費エネルギーを少なくするためには3つの要素が考えられます。まず1つ目は負荷を下げる。これは熱負荷や照明、コンセントなどの電力負荷を下げることです。2つ目は機器そのものを高効率なものにすること。高効率の空調機に変更したり、照明を蛍光灯からLEDに換えるなどの手段があります。3つ目は適正に運用すること。使っていない部屋の空調や照明を消すなどエネルギーの無駄遣いを避けることです。

矢作　デマンド値はどのように確認できるものでしょうか？

南井　まずは測ることが大事です。その施設の受変電設備(キュービクル)の中にデマンド計測をするためのセンサーを取り付ける必要があります。そのセンサーの計測値によって警報を出すようにしておき、警報を受けたら必要のない空調や照明を消したりして消費電力を下げるようにします。電気系統ごとに設置すれば、より細かな監視とコントロールが可能になります。監視に必要な機器の取り付けは、電気工事会社や計測のサービス会社が請け負ってくれますし、日頃キュービクルの点検をしている電気保安協会も取り付けの相談に乗ってくれると思います。

矢作　さまざまな劇場の設計を手掛けていらっしゃる長谷川さんにお伺いしたいのですが、最近の新規施設ではどのような対策をとっているのでしょうか？

長谷川　最近は新しい施設に関しては設計の段階からデマンド監視を提案することが普通になっています。電力だけでなく、どこにどれだけエネルギーが使われているのかわかるような状態をつくり、それと同時に断熱性能の向上など、省エネの機能を持つ建物を設計するのが現代では当然になってきていると思います。

矢作　古い施設における光熱費の課題はどのようなところにあるとお考えですか？

長谷川　劇場施設の場合、ホールやホワイエなどの巨大な空間と、会議室など、ある程度のサイズの２種類の空間を持っていると思います。小さな空間については、家庭での節電と同じようにこまめにつけ消しすることが大事ですが、大きな空間では大きな空調機を使いますので、動かすことそのものに負荷がかかり、細かくつけ消しすると逆効果になってしまいます。空間を分けて考えることがとても大切なことです。

共有スペースの活かし方を考える

矢作　劇場施設には、ロビーやホワイエなど非常に大きな共有スペースを持っているところもあります。そういう空間があると光熱費の高騰はかなりこたえるのですが、しかし劇場空間に求められる役割を考えると、単純に光熱費節約を目指すわけにはいかない側面もあります。

長谷川　昔は劇場というと使われていないときは真っ暗闇で、チケットを持っている人だけが来ればいいという施設だったと思います。しかし今は、公共施設として日常的に人々を招き入れてさまざまな活動が行われ、そこでコミュニティが生まれたりまちづくりに貢献したりと、ホール以外のスペースがいかに効率的に使われているかが求められてきていると思います。ホールに入る前にチケットを持っている人が集まるホワイエに関しては、ホールを使用していないときは空調も照明も消してしまう例が多いです。しかし、そうすると建物全体が非常に暗い感じになり、劇場そのものの印象が悪くなってしまいます。そのため、光熱費効率を下げずに、ホワイエを日常的に使い続けていく工夫が必要だと思います。たとえばホワイエを展示空間や会議室、打ち合わせスペース、カフェなどに使うことを考えてみる。そして空間を細かく分けて個別に空調ができたり照明効果を得られるようにする。全体を明るくしなくても良い空間がつくれるような設計を提案していけたらと思っています。

矢作　公立文化施設に今求められている役割として、さまざまな人が気軽に立ち寄れて、ときにはウォームシェアやクールシェアができる場所であることも重要だと思います。単に光熱費節約のために、じゃあロビーの電気を消しましょう、空調を切りましょうという方向にいかずに工夫することが必要ですね。

空調機の運用による工夫

矢作　次に、ホールの空調について、南井さんからお話を伺いたいと思います。

南井　ホールの空調システムは、多くの観客が入ることでホール内の二酸化炭素濃度が高くならないように、外気を取り入れ循環させる機能を持っています。外気の条件が良いときは、空調機で空気を暖めたり冷やしたりしなくても、外気取り入れのコントロールだけで室内環境を保てる場合もあります。

矢作　空調が一番大きく稼働する時期というのは、すごく寒い時期かすごく暑い時期だと想像はつきますが、どちらが電気をよく使う状況になりますか？

南井　夏の冷房時が一番電気を使うタイミングになります。

矢作　コロナ禍では、真夏でも換気のために上演中や休憩中も扉を開けていた劇場があったかと思います。

南井　ホールの空調は、扉を開けている状況を想定して設計されていませんので、扉を開け放していると空調が効かないということがあるかと思います。

矢作　本当に冷やしたいときなどは、扉を閉めておく時間をなるべく長く取り、開場する時間を一定の時間に抑え

ることも1つの方法ですね。大きな空間の場合、空調を入れるタイミングに関してはどのような工夫ができるでしょうか？

南井　会場が大きいと、空気を所定の温度まで暖めたり冷やしたりするのに時間がかかります。そのため、冷房の場合は外気温が一番高い瞬間に空調機を稼働させると最も消費電力が多くなってしまいます。そこで、あらかじめ外気温の低い午前中などに空調をかけ始めて室内を十分に冷やした状態をつくっておき、その後、外気温がピークのときに少し空調の能力を下げ、また夕方の開演時間に向けて空調機の能力を上げていくなどすると、外気温のピークと消費電力のピークが重なりませんので、デマンド値を下げる1つの方法になると思います。

矢作　そういった運用の工夫によっても光熱費の節約ができますね。施設によって違いはあると思いますが、そのあたりも参考にしていただきながら、まずは自分たちの施設がどのような環境にあり、どのような設備を持っているのか、現状を把握することが大切ですね。そのうえで、モニタリングのデータがあるならそれをどう活用するのか、新たな設備を取り入れるのかなど、対策を考えていただければと思います。

長谷川　いつでも訪れられる公共施設としての存在感をきちんとつくっていきながら、同時に光熱費を抑えていくということを考えると、施設ごとに工夫のしかたは異なると思います。その地域の環境やニーズに合った施設の活用方法を見つけ出し、そのなかで最も効率的に運用できる工夫を考えていくことが大事かなと思います。

公開
フォーラム

劇場を開く、市民と繋がる、地域を創造する。～劇場のコーディネート機能を開拓する～

● 講　　師　中本 正樹　小美玉市生活文化課 四季文化館みの～れ 館長補佐・事業統括
上田 假奈代　詩人、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表理事
藤 浩志　美術家、秋田市文化創造館 館長、秋田公立美術大学 教授

● モデレーター　水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

はじめに

水戸 雅彦氏

水戸　劇場、音楽堂等の活性化に関する法律の前文に、劇場、音楽堂は「新しい広場」として「地域コミュニティの創造と再生」を通じて、地域の発展を支える機能も期待されているという文言があります。「地域コミュニティの創造と再生」とはどういうことなのか、そして劇場をどのようにして地域に開き世界へ繋げていくか、講師とともに考えてみたいと思います。また前文では、「個人を含め社会全体が文化芸術の担い手である」と謳われています。これは従来のようにアーティストの公演を鑑賞するだけではなく、個人や社会全体が相互に協力して文化芸術に取り組もうという新しい考え方を打ち立てていると言えます。具体的には、鑑賞事業中心の事業展開でいいのか、事業のジャンルに偏りがないか、市民参加型事業においては劇場や専門家が主導する一方向的なものになっていないか。もっと市民が主体的に参加し、市民が主役となって新しい地域文化を創造する流れをつくっていくべきだと思っています。そのために、劇場の職員が市民と劇場を繋ぐコーディネーターとして機能するには何が必要か、講師の事例を聞きながら会場とともに考えたいと思います。

プログラム（1）

市民主体の活動が可能性の限界を超えていく ～みの～れで育まれた住民と行政の共創～

中本 正樹

中本 正樹氏

小美玉市は、平成の大合併で3つの町村が一緒になって誕生した町です。小美玉の玉は宝石、これをダイヤモンドになぞらえて、住民ひとりひとりの可能性はダイヤの原石で、これを見つけて磨き光をあてるまち、そんなブランディングをしています。

2009年、四季文化館みの～れは地域創造大賞総務大臣賞を受賞しました。さらに小美玉市がシティプロモーションアワード初年度に金賞をいただき、クリエイティブ分野でかなり目立つまちになってきているという実感があります。日本一になった映像クリエイターの若い夫婦がいたり、いばらき組子でランプを作るすご腕の建具職人の方がいたりと、近年はとくにクリエイターが熱いまちになっていますが、この背景として、みの～れの存在がとても大きかったと思っています。

みの～れの自主事業の1つに、「アートなお仕事体験」があります。クリエイターたちが、普段のお仕事を未就学児が体験できるようにアレンジして、自分たちで主体的に行っているものです。その他、おやこ企画やみの～れ住民劇団などがありますが、活動の根底にあるのは“対話”の文化です。これは、昭和40～50年代に隆盛を誇った地域の青年団で息づいていたもので、前館長がみの～れに注入しました。“対話”とは、会話と違ってあまり親しくない者同士の価値観や情報のすり合わせです。あなたと私は違うよねというスタンスからまず入っていくんですね。そのためには、恐れずに意見を出せる場の雰囲気づくりが必要です。みの～れでは、新たな組織を立ち上げるとき

は編成を重要視し、対話の場は多くて6～8人、必ず男女混合にしてその中核に信頼関係で結ばれている3人を置きます。そして、対話の場は全員出席が大原則で、全員で知恵を出し合い汗をかく、そして決めたことは全員が必ず守る。「意見を言い合う場」ではなくて「意見を聞き合う場」にすることを大切にしています。

私は、市役所に入り3年目でみの～れの立ち上げに関わったのですが、みの～れも建設時は反対がありました。財政が心配だとか、一部の愛好家のためのものでは？などの反対意見がありました。そのようななかで、公募で集まった建設プロジェクトの住民委員たちは、決まったことを発信する情報の仕組みは良くないと考え、今どんな話し合いをしているかを手作りの情報紙にして全戸配布をしたんです。当然のことながら反対する人もどんどん増えました。しかし、住民委員たちは、「声を挙げて反対する人こそまちの将来を真剣に考える私たちの味方だ」という究極のポジティブ思考で、“対話の文化”にのっとって、賛成・反対の双方を集めてシンポジウムを開きました。すると、「子どもたちの未来のために」という点で双方合意しました。その結果、人間のように1年1年成長し続ける「呼吸する文化センター」というコンセプトが生まれました。

「最大の敵は無関心」と捉え、みの～れが立ち上がる前からいろんな企画をどんどん行い、みの～れについて語る人を増やしました。すると若い住民の人たちが多数参加してくるようになったんです。10代の人や他市町村に住んでいる人など、市役所から顔が見えない人たちがどんどん集まり出した、ここが本当に大事なところだったと思います。“劇場育ては地域育て”という価値観で活動してきたことが功を奏したのではないかと思います。

その後、事業を企画遂行する「各種実行委員会」「プロジェクトチーム」、それをフォローするボランティア組織「みの～れ支援隊」が立ち上がり、さまざまな住民参画の仕組みが生まれました。みの～れでは、住民参画を3つの段階に分けています。行政主導の「住民参加」、住民と行政の共創「住民参画」、住民が主導する「住民主体」です。まず目指すべきは「住民参画」ですが、職員の伴走が必要なので、職員の限界がみの～れの限界になってしまいます。みの～れが成長するためには、対話型リーダーが牽引する「住民主体」を目指していこうと、住民と思いを共有しています。

みの～れで培った“対話の文化”ですが、その後、合併先の文化施設の改革や、地方創生の総合戦略の策定の過程でも実践し、市役所の若手職員にも広がりました。2018年に開催した全国初のヨーグルトサミットは、とても大規模なイベントでしたが、“対話の文化”を用いて住民の方たちと企画運営し、2日間39,000人を集め、大成功となりました。そして、ヨーグルトサミットで育ったリーダーたちが市民チームを立ち上げ、動画配信やWebメディアで自発的にまちの魅力を発信してくれるような仕組みも生まれました。

2022年、みの～れはハタチになりました。茨城県内や全国規模の組織にも広がりつつある“対話の文化”ですが、その聖地であるみの～れでさらに磨きをかけ、住民の主体性のさらなる向上を目指していきたいと思っています。

プログラム(2)

釜ヶ崎芸術大学は誰もが表現者 ～社会包摂の表現の場づくりから地域へ～

上田 假奈代

私は2003年に、大阪市の現代芸術の拠点をつくる事業に参画し、大阪市浪速区にココルームを開設しました。芸術に関心のない人にも来てもらうため、喫茶店のふりを始めたのです。音楽や美術など表現活動をしていて、仕事にしたいと思っている人がスタッフになり、来た人が自然と隣の人と話をしてしまうような、少し変わったカフェになりました。そこでお客さんと一緒にごはんを食べながら話をするうちに、困りごとややってみたいことを聞くようになり、だったらこの場所を使ってできることがあるんじゃないかと、若い人達と仕事について語り合う場をつくったり、コミュニケーションが苦手な人には演劇や表現のワークショップを行うようになりました。

上田 假奈代氏

2008年に市の事業が終了し、釜ヶ崎に拠点を移した私は、また小さなカフェを開きました。釜ヶ崎は、1960年代から日本の高度経済成長を支えるべく道路や建物を作ってきた日雇い労働者が集まるまちです。その人たちが歳をとり、今は2人に1人くらいが生活保護を受けています。

ここでもワークショップみたいなこと、たとえばカルタをしたり俳句を作ったり、文字で遊ぶことから始めました。いつも来る安藤さんというおじさんがいました。いくら誘っても、決して参加しないんです。1年ほどしてはじめて、手紙を書くワークショップに参加し、「どうやって書くの？」と聞かれて、安藤さんは字が書けないんだとわかりました。その時、一番大事なことは表現することではなく、みんなが安心して表現できる場をつくることだと思ったんです。みんなが安心して表現できるというのは、ひとりひとりの存在がちゃんと認められるということです。そういう場をつくりたいと思うようになりました。

そこで高齢化して、出歩けない人が増えるまちで始めたのが、釜ヶ崎芸術大学です。建物があるわけではなく、釜ヶ崎のまち全体を大学に見立てた“大学”です。年間100件くらいの講座を開いていて、これまでに1万人以上が参加してくれました。おじさんたちと踊ったり、狂言をしたり、写真家と一緒にまちに出てさまざまなことを発見したり。民族楽器のガムランで曲を創作したりもしました。私が担当している詩の講座では、2人でペアになってお互いを取材し、詩を作ります。若い人が釜ヶ崎のおじさんに話を聞いて、おじさんも若い人の話を聞いて詩を交換するんです。さらには、高齢の方が多いので、死についても勉強しておきましょうということでお坊さんに来てもらって、お葬式のプランを考えたり辞世の句を作ったりという講座もしています。おじさんたちの生きてきたこと表現してもらい、それを私たちも受け取って、学び合っています。

おじさんたちが本当に得意なのはやはり土木です。2019年に、敷地内で井戸掘りをしました。おじさんたち、よぼよぼなのにスコップを持つとカンっと腰が入るんです。井戸は釜ヶ崎の知恵と技術がないとでき上がらなかったと思います。小さな子ども、外国人の方、難民の方、西成区の会社の方などたくさんの人が参加してくれて、それぞれの役割を見つけて生き生きと活動していました。一緒に作業をすることで、それまで話せていなかったことを話してくれるようになった人もいました。

最近は、地域の公園で、象徴的な建物である「あいりんセンター」をスケッチして語る講座を開催したり、西成労働福祉センターと協働して、労働者が減り地域が変わっていくなか、何かアートでできることがあるのではないかと探っています。

現代アートの業界から私たちの活動がどのように見えているかですが、2014年にヨコハマトリエンナーレに釜ヶ崎芸術大学が招聘されました。展示をして、2日間の炊き出しカフェを行ったのですが、この炊き出しに参加した美術館の監視スタッフの方から、「美術館では200人以上の人が働いているけれど、部署が違うと話をする機会がない。でも炊き出しカフェでは、清掃のおばさんから芸術監督の森村さんまで一緒にご飯を食べた。これって釜芸がやりたいことの姿でしたよね」というメールをもらったのを印象深く覚えています。劇場も同じだと思うのですが、いろんな人がいて、そうした人たちとともに場所をつくる、それが大事なことだと思います。ヨコハマトリエンナーレ以降は、芸術祭や美術展に呼んでもらえるようになりました。

私が20年くらい活動を続けてきてやっと言葉になりました。釜ヶ崎にいる人は社会的弱者が多い。だけどそういう人たちが、いろんな経験をしてきたが故に、安心して正直に表現をしてくれたとき、その表現はめちゃくちゃ面白いんです。そして深い。したたかだし笑えるし、ユニークだし含蓄がある。課題だらけで、支援される存在と思われていますが、実はその人たちが表現することは、社会を変えていく力を持っていると思うんです。ただ、その力を発揮するためには耕さなきゃいけない。そのためのいくつもの「居場所」をつくり、「出番」を設けること。ゆるやかな「つながり」をつくっておくこと、そして、表現し合うこと。耕すために、アートはけっこう役立つんじゃないかなと思っています。

プログラム（3）

生きるためのそうぞうする力 ～地域社会に新しい変容を促す～

藤 浩志

藤 浩志氏

先日、私が暮らす福岡県の糸島市で、20人ほどのアーティストが出品する小規模な国際芸術祭を開催しました。テーマは「共同体／共異体」。共同体というものの前提には、いろんな異なるものが集まった「共異体」があるのではないでしょうか。いろんな価値観を持つものが同居する状態が、大事だと思っています。共同体というとどこか権威的で、ルールの中で抑えられているような印象がありますが、それを外していくときに、この共異体の考え方が重要になると思います。

あなたのまちは魅力的ですか？まちは自分ひとりにとって面白くても意味はなく、まわりの人とともに面白くなることが大事です。まちが魅力的であるには、あなたの生活が魅力的でなければいけないし、そして、まわりの人も魅力的であることが必要です。そのためには、空間・時間・人間を通して、多様で多層的な要素がどれだけ含まれているかが大事です。

たとえば表現者が種であるとすれば、その種が育ち花を咲かせるには、いろんな要素が必要です。土壌が肥えてないといけないし、そこに光を当て水を与えなきゃいけない。今、“推し”を見つけて活動をする人たちがたくさんいますが、私はそういうファンの活動というのは水を与えることだと思っています。同じように、いいねと言って応援する人や、記事を書いて光を当てる人が必要です。また、その土地にふさわしい、そこで開花する種を運んでくる風の人、これがコーディネーターかもしれません。もちろん、その土地で作物を育てようと考えている土の人も必要です。いろんな特質がある人たちがいることで、その土地でしかできない文化芸術が育っていく。そこをどう仕掛けていくかが、コーディネーターの醍醐味だなと思います。

ものごとの価値観は、「誰と」見るのか、「誰と」接するのかで変わります。アートをやっていると、ついつい作った物に目が行きがちですが、それに向かう時間の質が実は大事です。つまり、楽しい時間として体験できるかどうか。その人の絶望の時間を期待の時間に変え、その時間をできるだけ長く持続させる方法・手段を考える必要があると思います。

新しい人材や方法を見つけなくてはならないとき、私は常識を超えた方法に一番惹かれます。意味や価値は、時代によって、状況によって、あるいは関係によって変化するので、「これは意味あるの？」と思うものほど、実は意味があるかもしれない。となると、“わからない”ということもとても大事なんです。料理にたとえるとわかりやすいと思います。おいしいとかまずいとか、いろんな評価がありますが、体調によって辛いものが食べたくなったり、体を壊していたらこってりした中華料理は避けようと思ったり。状況によって変化する評価のなかで、私は「なんだこれは！」がすごく重要だと思っているんです。たとえばラーメンなら、「なんだこれは！これまでにないラーメンだ！既にラーメンを超えている！」と思うもの。既に○○を超えているというものに出会うと人は戸惑うけれど、感動するものです。そして、それが芸術的と評価されたりします。私たちはこの「なんだこれは！」を意識し、それを超えていく活動をしていくことが重要だと考えています。

文化芸術というとつい感性と言ってしまいますが、観察する力、感じる力、想像する力、作る力がすごく重要です。観察は、見えているものを見るのではなく、見えていないものをいかに見るかが大事です。過去を読み解く、未来がどうなるかを予想する。全体を分析して、どんな成分で成り立っているかをイメージする。そして、その裏側で誰かが利益を得ているのか、それによって誰が悲しむのか、誰が喜んでいるのかなどを、どれだけイメージできるのかが感性です。見えていないものを見ようとする力を育てるためには、やはり喜怒哀楽を含めて心を動かしていくことが大事です。そのためには、さまざまな活動を許容する環境が必要です。排除するのではなく、いろんなところからいろんな可能性が生まれるということを考えながら、「面白い」を追求していくのがよいのではないでしょうか。

プログラム (4)
クロストーク

劇場の内外を繋ぐ“縁側”の役割

水戸　皆さん、他の講師のお話を聞いて印象に残った点はありますか？

上田　藤さんのお話を聞いて、少し意地悪な質問になってしまうんですが、つまらない人にどう対応したらいいか、そこをもう少しお話ししたいなと思いました。

藤　一緒に作業をするとか、同じ空間にいることが手がかりになるかもしれません。自分と異質なつまらない人と思っていても、コンタクトすることでその人から滲み出るものをキャッチできる。先ほど、最大の敵は無関心、という言葉もありましたね。

水戸　無関心の原因には2種類あって、面白いか面白くないかがわからないので関心を持たないというのが１つと、自分なりの価値観をはっきり持ってしまっているから、それ以外については関心がないというのが１つあるような気がしています。これらの無関心に対してどのようにアプローチしたらいいのかというのが我々の課題かと思います。

本日の１つ目のテーマ「劇場を開く」、この開くことについてはどうお考えですか？

中本　私がみの～れの前館長から言われたのは、住民から“お茶飲み”に指名してもらえる職員になりなさい、ということです。心理的安全性のある場づくりをして、住民のサードプレイスになることが大切だという教えです。

上田　ココルームは喫茶店のふりをして365日開き続けています。うちもフリーティーを置いていて、入ってきた人は誰でもお茶が飲めるんです。とりあえずお茶を出してひとしきり話を聞き、場合によっては地域にお繋ぎするということをしています。

藤　まずそこに対話できる人がいるかどうかですね。美術館や劇場を開くことを考えると、その中間の領域、つまり内側の閉じている空間と外側のオープンな空間の間の縁側的な領域をどうつくるか。無駄話や雑談ができる体制をつくっていることが大事だと思います。

水戸　日常の劇場と非日常の劇場という考えもありますね。催し物がなく、ホールが使われていないとき、まったく人がいない劇場もあれば、人が行き来して憩いの場になっている劇場がある。日常の劇場をどのように形づくっていくかについてはいかがですか？

中本　みの～れは、おしゃべりしやすい雰囲気を出すことにしていますので、中学生たちが学校帰りに寄って部活の話や恋愛話をしながらお菓子パーティをしたりしています。学校の話を教えてくれたりして、施設のおじさんと地域の子たちが話せる環境はいいなぁと思うんです。

上田　ココルームはいろんな困難を抱えた人が来られるので、スタッフがしんどくなることがあります。そこでワークショップという形で時間と空間を区切り、アーティストなどを呼んで2時間をお任せします。すると私たちとは関係が膠着していたような人も、新たな人と出会うことで、違う側面を見せてくれるようになります。

藤　私たちが運営する施設は屋根付き広場のようなところですが、館内の展示室だった大きな空間も常に開いていて、勉強している子がいたり、ウォーキングの練習をしている人がいたりします。ただ、日常の延長としてそういう空間であってほしい一方で、ホールや美術館はやはり非日常を体験する場であるとも思います。日常の延長から超非日常までのグラデーションをうまくつくれないかなと仕掛けを考えています。

“ゆるい”ネットワークを築く

水戸　２つ目のテーマ、「市民と繋がる」についてはいかがですか？ゆるいネットワークの必要性の話が出てきたかと思いますが。

中本　職員が住民全員とつながることは不可能です。コアとなる住民リーダーのところに共感する人たちが集まってコミュニティができますので、そのコアになる人と私たち劇場が繋がることが大事だと考えています。

上田　私の場合は活動を続けているうちに、行政や司法、医療や貧困関係、幅広く横の繋がりができて、今はそうした繋がりに支えられています。ココルームにボランティアやインターンに来た人が他の組織に就職するなど、外の団体との繋がりもできています。また、ココルームでは無料のブックカフェを開催しています。釜ヶ崎のおじさんたちはスタッフに話を聞いてもらいたくてやってくるんですが、全部に付き合うことはできないので、誰かと話したい人が店長になって、来た人とおしゃべりできる場をつくったんです。

藤　繋ぎ手としてゆるい人がいると、まわりに人が集まって来て、いい循環が生まれますね。繋がりをつくろうとすると、どうしても厳しく堅固なものにしようとしてしまいますが、そうすると破綻してしまうことも多い。繋がりのゆるやかさがミソだと思います。

水戸　強固なネットワークの場合、目的意識も役割分担もはっきりしていて、短期的には威力を発揮するんですが、目的がはっきりしているからこそ、タスクが終了した途端に駄目になります。ゆるやかなネットワークの良い点は、無駄とか余白がたくさんあることです。地域のコミュニティや地域の劇場を考えた場合に、まちにたくさんいる面白い人達とゆるやかに繋がることによって、その余白の部分から新しいものが生まれる可能性があるんじゃないかと思っています。

3つ目のテーマは「地域を創造する」です。それぞれこういう展開をしたいなとか、全国の劇場職員の方に対してこれをやってみてと伝えたいことがあればお聞きできますか。

中本　対話の文化を実践していくと住民の人たちや職員のシビックプライドが磨かれていくので、少しずつ輪が広がり、熱をもった層ができ上がっていきます。とはいえそんなに急に変わることはできませんので、まず職員側からまちへ出かけていくことかなと思います。チラシ置きでもいいですし、取材を名目に話を聞きに行くと、地域の知らない話や水面下の話を聞き出せて、他分野と繋がりをつくるときに良い切り札になったりします。

上田　私は“弱さの力”を活かしていくことかな、と考えています。ココルームではスタッフが足りなくて困っていたのですが、そう言うと、まわりの人が入れ替わり立ち替わり来てくれて手伝ってくれるんです。自分が弱いということを認めてそれをオープンにすることですね。弱いからこそ何かが生まれていく、そんなことを思っています。

藤　「創造する」という言葉に惑わされないことが大事だと思います。何かを作ろうとすると、自分でこれまでに経験したものしか作れない。地域の中で新たに何か発生するとすれば、それはまったく予想しない方向からしか発生しない。何だかわからないっていう状態が実は一番良くて、モヤモヤするから話し合い、化学反応が生まれる。まったく異質なものと異質なものが出会うことが大事なんです。

水戸　せっかくの機会ですので会場からもご質問をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

出席者　次の5年間など、こういうことをしたいという展望があれば、お聞かせください。

中本　今、住民の人たちが自分たちでアウトリーチをしたいと言い出しているんです。ただ集客するだけでなく攻めていきたいそうです。あ、なるほど面白いね、と思い、今企画を進めているところです。

上田　私は事業承継のことを考えるようになりました。事業を渡す人、継ぐ人だけではなく、そこに第三者がいることが重要なのではないかと思います。そのために定期的な対話の場を設けたところです。

藤　これからやらなきゃいけない課題はいっぱいありますが、一番の課題は、プロジェクトが本当に欲しい人に届いてないという印象があることです。それをどうして届けていくかを考えたいですね。

ワークショップ1

次世代リーダー養成プログラム

● 講師兼モデレーター　柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

● ファシリテーター　大久保 充代　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター
木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー
水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

日　時　令和6年2月14日（水）13：00～19：00・15日（木）9：30～17：00

会　場　東京都中小企業会館 講堂

受講者　21名

「将来、どのような劇場職員を目指したいのか」「自身のキャリア形成をどのように考えるのか」若手中堅職員にとっては自身の人生設計に関わる重要なテーマです。本研修では、組織コミュニケーションという観点から、公立劇場におけるリーダーシップについて、望ましいリーダー像を議論し、将来自身がどのようなリーダーを目指すかを考えました。

現職の館長や館長職を経験したファシリテーターとの意見交換を交え、近しい世代の受講者同士で活発な議論が繰り広げられました。

講座内容

1日目

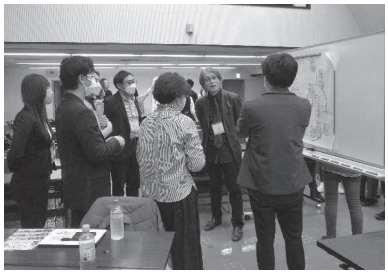
- ＜レクチャー＞リーダーシップを考えるための資源を引き出す①
- ＜レクチャー＞リーダーシップを考えるための資源を引き出す②
- レクチャーに関する意見交換を交えて班内で自己紹介
- 各自の「Will・Can・Must・Cross」を班内で共有する
- グループワーク①「Will・Can・Must・Cross」を各班でまとめる

2日目

- グループワーク②「Will・Can・Must・Cross」を各班でまとめる
- 「Will・Can・Must・Cross」発表・質疑応答
- グループワーク③「Cross」の再考
- フリーディスカッション
- 成果物の最終確認
- ファシリテーターによる講評
- 講師兼モデレーターによる総括

講師によるリーダーシップに関するレクチャー

グループワークで望ましいリーダー像を考える


成果物の最終確認

ファシリテーターの講評

ワークショップ2 「広報の考え方の基本」～ワークショップ

●講　　師　阿南 一德　東京藝術大学 演奏藝術センター 准教授

開催日　令和6年2月20日（火）13：00～17：00

会　場　東京都中小企業会館 講堂

受講者　22名

はじめに「広報7つの視点とそれぞれの3つのポイント」をテーマに広報の基本を学び、それを土台として、受講生が持ち寄った企画テーマでチラシのラフ案を作成するグループワークを行いました。最後に、グループワークの成果物をもとに、講師から広報の考え方のヒントが示されたほか、受講生同士の意見交換や情報共有などが活発に行われました。

講座内容

- ＜レクチャー＞広報の考え方の基本
- ＜ワークショップ＞公演（企画）のコピーを考え、チラシのラフ案を作ってみよう
- 発表と講評

広報の基本についてのレクチャー

グループワークでチラシのラフ案を作成する

グループごとに発表

ご挨拶

文化庁長官　ご挨拶
全国公立文化施設協会 会長　ご挨拶
企画委員　ご挨拶

文化庁長官　ご挨拶

令和５年度全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会の開催に当たり、ご挨拶申し上げます。

まず、令和６年能登半島地震により亡くなられた方々に対して深く哀悼の意を表するとともに、被災された方、そのご家族及び関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

近年の長引くコロナ禍における困難と不安のなか、人々の心を癒し、勇気づけてきたのが文化芸術の力であったことは言うまでもありません。劇場・音楽堂等の活動に携わられる皆様が、文化芸術の灯を絶やさぬよう、細心の注意と最大限の努力を重ねられていることに敬意を表します。

文化庁におきましても、皆様の活動を支えるため、劇場・音楽堂等における文化芸術活動の強化に資する取組に対する支援をはじめ、引き続き様々な施策の実施に努めて参ります。

劇場・音楽堂等において活躍するアートマネジメント人材は、文化の作り手と受け手をつなぎ、優れた実演芸術の創造・発信、普及、地域社会とのネットワーク形成や社会包摂の推進を図るなど、文化芸術の担い手として欠かせない存在です。

本年度の研修では、地域の文化拠点としての取組やハラスメントについて等、劇場・音楽堂等が活動を継続・発展させるための手がかりが盛り込まれているものと思います。本研修会が、皆様の新たな気づきや学びの場となることを大いに期待しております。

結びに、本研修会の開催にご尽力された関係者の皆様に謝意を表するとともに、本研修を受講された皆様が、全国各地の劇場・音楽堂等でより一層ご活躍されることを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

文化庁長官

都倉俊一

全国公立文化施設協会 会長　ご挨拶

日頃より当協会の運営にご協力をいただきありがとうございます。

研修に先立ち、この度の能登半島地震により被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。また、地震で失われた大切な命に対し、深い哀悼の意を捧げます。被災された施設や関係者、地域の皆さまが一日も早く日常を取り戻せるよう心より願っています。

コロナ禍は、昨春に感染対策が緩和されましたが、まだまだ一定数の感染が続き公演等の中止も散発しています。加えて、地震や地球温暖化に因ると見られる豪雨等の自然災害、世界的な政治情勢の不安定化、それらに伴う光熱費を始めとした諸物価の高騰や為替の著しい円安傾向など、舞台芸術や地域の劇場・音楽堂等を支える社会環境や経済状況は大きな変動期を迎えています。

全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会は、文化庁から受託する「劇場・音楽堂等基盤整備事業」の中核をなす研修会であり、全国の職員の能力の向上を通じて地域の劇場・音楽堂等の活性化を図ることを目的としています。

今回の研修では新たな切り口による配信５講座に加えて、公開フォーラムの収録、再構成した人材養成講座の配信、そして対面によるワークショップ２プログラムと、講義内容に応じた組み立てとなっています。

この研修が、各施設の運営や事業展開の参考となり、地域における劇場・音楽堂等の役割やあり方についても改めて見つめ直す一助になればと願っています。

最後になりますが、研修会を開催するにあたり、ご尽力いただきました企画委員や講師の皆様に御礼申し上げますとともに、劇場・音楽堂等で働く皆様にはくれぐれも健康に留意され、引き続きご活躍されますことを心より願っております。

（公社）全国公立文化施設協会 会長
野村 萬斎

企画委員　ご挨拶

■ 研修会企画者としての自問

世界で猛威を振るった新型コロナウィルスによる自粛生活から人々の暮らしはやっと日常を取り戻したかに見える。しかし、世界に目を向ければ、戦争だらけの世界である。ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとパレスティナの争いにより、日々両国の罪のない人々の命が奪われている。

芸術・文化は平和な中にこそ輝く。ウクライナのバレエ団公演でダンサー達が表現した平和への願いを、芸術・文化に携わる私たちは自分事として受け止められるか。

研修会企画者としては、この研修会に多くの方が参加して、何かを持ち帰ってもらうことを願っている。しかし、提供したプログラムが本当に参加者の求めるものとなっているであろうか。ネットを検索すれば、アートマネジメントの専門的な知識は溢れている。しかし、知識を獲得するだけではなく、研修会に参加することで、今後の仕事を進めていくうえで、自己変容の機会となってもらえれば企画者としての最低のミッションは達成されたのかと思う。

（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
木全 義男

■ 謙虚なリーダーシップ　―みんながリーダーの時代へ―

コロナ禍を経て公立文化施設を取り巻く環境はより一層激しさを増しています。時代の変化に呼応し社会の中に息づく劇場として、次代を担うリーダーはどのような行動や対応を求められるでしょうか。また、リーダーとしての資質をどのように育んだらよいでしょうか。リーダーシップ理論の研究は1930年代頃から活発ですが、リーダーシップ行動は、時代の変遷と共に変容しています。過去には、扇動型、利己型、欺瞞型、偽善型、トップダウン型など一人の強力なリーダーが支配と強制の関係をテコに隆盛しました。リーダーに一時的な先導が認められたとしてもこれからの組織運営は、一人に依存しない組織をどのように構築するかが喫緊の課題と考えます。すなわち、リーダーシップとは、リーダーとの関係性において成立する行動と捉えてよいでしょう。劇場には「ミッション」があるように、リーダーには「ビジョン」が必要です。自身のキャリア形成やキャリアパスを視野に組織コミュニケーションの観点から「謙虚なリーダーシップ」について考えましょう。

（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
柴田 英杞

■「なくてはならないもの」

4年に及ぶコロナ禍は、私たちに大切な気づきを与えてくれたと感じています。当初、劇場・音楽堂は「不要不急」に分類されてしまいましたが、市場原理で区別する「必要なもの」と「不要不急のもの」との分類とは別に、人間には、「なくてはならないもの」があることに気づかせてくれました。緊急事態宣言による休館が明け、劇場が再開した時に来場したお客様の喜びの声は、私たちに、劇場が信頼できる人間関係や安心できる場所と同様に、「なくてはならないもの」だと確信させてくれました。

新年に起きた大規模地震などから、劇場・音楽堂等は今、さらなる安全安心への備えや2024年問題への対応など課題が絶えません。そのような状況の中、このアートマネジメント研修会を通じて劇場運営にかかわる一人ひとりが、人間にとって「なくてはならない」仕事に誇りを持ち、同じ目標を持つ仲間と一緒に考え、学ぶことによって、劇場をさらに豊かな場所にしていってくださることを期待しています。

（公財）東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 副館長
鈴木 順子

■ クリエイティブ人材と公立文化施設

生成AIに、今後人間の仕事で残るのは何かと聞いたところ、「改善、創造、交渉」の分野と答えたという話があります。これらの仕事を担うのはクリエイティブ人材ですが、今の日本の教育はまだまだ知識の習得と設問への模範解答を導き出す学習を基本としており、そのような人材を育成するためのプログラムは限られたものとなっています。翻って、公立文化施設の事業は、優れた文化芸術に触れ感性を磨き、参加体験事業でコミュニケーション力と非認知能力を引き出し、創造事業で独創的な地域文化を発信していく、まさにクリエイティブなコンテンツがぎっしり詰まった内容であり、公立文化施設はこれからの社会が求める最も重要な公共財だと言っていいでしょう。

劇場法の前文にある「個人を含め社会全体が文化芸術の担い手であること」は、国民一人一人がクリエイティブ人材を目指そうという示唆のようにも読み取れます。そして、「新しい広場」「世界への窓」は、それらの人材が紡ぎ出す人と地域を豊かに活性化するためのプラットホームであり、そこから「地域コミュニティの創造と再生」のさまざまな活動が生まれていくというイメージが浮かび上がります。本研修会が、そのようなイメージを共有し膨らませていくための機会になることを心から願っています。

（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター
水戸 雅彦

参考資料

オンライン配信プログラムパンフレット

公開収録参加者募集チラシ

ワークショップ１（次世代リーダー養成プログラム）募集要項

ワークショップ２（「広報の考え方の基本」～ワークショップ）募集要項

ARTS MANAGEMENT SEMINAR 2024

2.1(thu)-3.17(sun)

ONLINE PROGRAM

いつでも どこでも みれる

全国劇場・音楽堂等職員
アートマネジメント研修会

文化庁

令和5年度文化庁委託事業
劇場・音楽堂等基盤整備事業

オンライン配信プログラム

配信期間：令和6年2月1日[木]～3月17日[日]

THE ASSOCIATION OF PUBLIC THEATERS AND HALLS IN JAPAN
公益社団法人全国公立文化施設協会

令和５年度文化庁委託事業 劇場・音楽堂等基盤整備事業
全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会

ONLINE PROGRAM

オンライン配信プログラム　配信期間：令和６年２月１日（木）～３月17日（日）

お互いにこれはなんだろうと興味を持ってつながる・場を共有する

■近藤良平氏に聞く
「埼玉回遊」と休館中の事業実施について

講師：近藤良平　振付家・ダンサー、コンドルズ主宰、彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督
進行：大堀久美子　編集者、ライター

講義概要　彩の国さいたま芸術劇場の大規模改修工事のための休館を機に始まったプロジェクト「埼玉回遊」。埼玉県の各地を巡り、多彩な文化を探索する本プロジェクトを中心に、近藤良平氏の地域での活動と、劇場休館中の事業実施についてお話を伺います。

竹間沢車人形保存会＠三芳町　©湯越慶太

上映機材を持ってなくてもできる？予算はどれくらい？

■中小規模館でもできる
「映画上映会」の可能性を考える

講師：前原美織　山口情報芸術センター[YCAM] 学芸普及課 シネマキュレーター
モデレーター：木全義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

講義概要　デジタルシネマとは、映画上映の機材は、など映画上映の基礎的なことを学び、予算の少ない中小規模館でも「こうすればできる」というノウハウやホールを上映に適した環境にする工夫、集客の工夫を考えます。併せて、YCAMの先進的な事例を通して公共劇場で映画上映を行う意義についても深掘りします。

線引きが難しく何も言えなくなる？ハラスメントかどうかの基準とは

■劇場・音楽堂等におけるハラスメント
～予防のための基礎知識とケーススタディ～

講師：植松侑子　舞台芸術制作者、
上級ハラスメント対策アドバイザー（（一社）ハラスメント対策協会）
モデレーター：鈴木順子　（公財）東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 副館長

講義概要　2022年4月1日より、パワハラ防止法に基づき、事業主は職場におけるパワーハラスメント防止のための措置を講じることが義務化されました。まずは「ハラスメントとは何か」「どういったことがハラスメントに当たるのか」という基礎知識を身につけ、劇場・音楽堂等で起こり得るケースについて考えます。

管理主体の“業務”から顧客志向の“事業”へ

■シリーズ「貸館を考える」
～先進事例に学ぶ貸館事業について～

講師：生田隆明　（公財）三重県文化振興事業団 三重県総合文化センター
施設利用サービスセンター 施設運営課 課長
モデレーター：間瀬勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

講義概要　各施設で行われている「施設提供事業」いわゆる貸館事業の活性化を期待するプログラム。ホール貸し出し時のオプションサービスを考え提供するなど、ホスピタリティの向上で利用者の満足度を上げる工夫をしている三重県総合文化センターの事例を紹介し、戦略的に貸館を考え利用率の向上を図るきっかけとする講座です。

消費エネルギーを低減するには？デマンド値とは？

■あなたの施設でできる、光熱費節約のヒント

講師：長谷川祥久　（有）香山建築研究所 代表取締役所長
南井克夫　（株）環境エンジニアリング 代表取締役
モデレーター：矢作勝義　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

講義概要　各公立文化施設で喫緊の課題となっている光熱費の高騰。ご自身の施設で最もエネルギーを使用しているのは何か、どの季節にどれくらい使用しているか、把握していますか？大きな削減は難しくても、何らかの工夫で数パーセントでも節約できないか…光熱費節約の可能性を考えます。

2.1(thu)-3.17(sun)

公開フォーラム

■劇場を開く、市民と繋がる、地域を創造する。
～劇場のコーディネート機能を開拓する～

講義概要　鑑賞の場としてだけではなく、人が集まり交流、活動する場、そして地域の創造、再生、発展に寄与することを期待される劇場・音楽堂等。地域に根差し、市民やさまざまな団体と連携、協働し、「新しい広場」「世界への窓」として地域の文化拠点になるために何が必要なのか。 さまざまなフィールドの最前線で活躍する3人の講師と共に、これから次の一歩をどこに向けて踏み出したらいいのかを考えます。

□ はじめに

モデレーター：水戸雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

“対話の文化”のもと 進化する住民参画

□ プログラム（1）
市民主体の活動が可能性の限界を超えていく
～みの～れで育まれた住民と行政の共創～

講師：中本正樹　小美玉市生活文化課 四季文化館みの～れ 館長補佐・事業統括

「行ったらあかん」と言われたまちで 安心して表現できる場をつくる

□ プログラム（2）
釜ヶ崎芸術大学は誰もが表現者
～社会包摂の表現の場づくりから地域へ～

講師：上田假奈代　詩人、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表理事

つまらない？おもしろい？ 価値・意味は○○によって変化する

□ プログラム（3）
生きるためのそうぞうする力
～地域社会に新しい変容を促す～

講師：藤浩志　美術家、秋田市文化創造館 館長、秋田公立美術大学 教授

ゆるやかなネットワークをつくる “開く”の裏には”閉じる”がある

□ プログラム（4）　クロストーク

講師・モデレーター全員

人材養成講座

危険なこと　禁止行為 施設側で判断すること

■ 舞台技術と安全管理
～工夫から生まれる安全対策～

講師：伊藤久幸　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

講義概要　技術スタッフだけでなく、すべての劇場・音楽堂等職員が考えていくべき舞台の安全管理についてお話しします。危険なこと、禁止行為、施設側で判断すべきことは？札幌文化芸術劇場hitaruでの安全対策の取り組みについてもご紹介します。

■ 過年度プログラム再配信

文化政策と劇場・音楽堂等（令和3年度プログラム）

講師：柴田英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

劇場・音楽堂等の事業、危機管理とリスク対応
（令和3年度プログラム）

講師：間瀬勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

自治体文化政策と劇場・音楽堂等（令和4年度プログラム）

講師：中川幾郎　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー

ワークショップ（対面開催）

ワークショップ 1　※受講申込は終了しました

次世代リーダー養成プログラム

講師兼モデレーター：柴田英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

開催日：令和6年2月14日（水）・15日（木）
会　場：東京都中小企業会館 講堂

ワークショップ 2　※受講申込は終了しました

『広報の考え方の基本』～ワークショップ

講師：阿南一徳　東京藝術大学 演奏藝術センター 准教授

開催日：令和6年2月20日（火）
会　場：東京都中小企業会館 講堂

ONLINE PROGRAM

受講申込

詳しくは
ウェブサイトをご覧ください。

全国劇場・音楽堂等職員
アートマネジメント研修会ウェブサイト

www.zenkoubun.jp/arts_management/

ご注意：

・視聴に関わる通信費用は視聴者のご負担となります。

・配信映像は、ネットワークの回線状況や視聴者側の環境により、
再生が出来ない場合や画面・音声が不安定になる場合があります。
ご了承ください。

主催：文化庁・公益社団法人全国公立文化施設協会

問い合わせ先：

公益社団法人全国公立文化施設協会

〒104-0061 東京都中央区銀座2-10-18 東京都中小企業会館4階
tel 03-5565-3030 fax 03-5565-3050
e-mail art@zenkoubun.jp

令和５年度文化庁委託事業　劇場・音楽堂等基盤整備事業

全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会

公開収録 参加者募集!!!

2024年2月～3月に配信予定のオンラインプログラムの**公開収録**を行います

（事前申込制・先着順）

劇場を開く、市民と繋がる、地域を創造する。

～劇場のコーディネート機能を開拓する～

鑑賞の場としてだけではなく、人が集まり交流、活動する場、そして地域の創造、再生、発展に寄与することを期待される劇場・音楽堂等。地域に根差し、市民やさまざまな団体と連携、協働し、「新しい広場」「世界への窓」として地域の文化拠点になるために何が必要なのか。

さまざまなフィールドの最前線で活躍する3人の講師と共に、これから次の一歩をどこに向けて踏み出したらいいのかを考えます。

【日　時】 2023年 10月31日(火)　11:00～16:00
【会　場】 東京都中小企業会館９階 講堂 （東京都中央区銀座2-10-18）
【対　象】 劇場･音楽堂等職員,地方自治体の文化芸術振興担当者,アートマネジメント教育関係者,学生，アートマネジメントに関心のある方，一般の方等
【定　員】 ３０名（申込先着順）
【参加費】 無 料
【主　催】 文化庁・公益社団法人全国公立文化施設協会

プログラム＜予定＞　※現時点の予定であり、変更になる場合があります

11:00～11:15	開会のご挨拶・導入	挨　拶：全国公文協 ﾓﾃﾞﾚｰﾀｰ：**水戸 雅彦** （全国公文協 コーディネーター）
11:15～12:00	プログラム(1) 市民主体の活動が可能性の限界を超えていく ～みの～れで育まれた住民と行政の共創～	講師：**中本 正樹** （小美玉市生活文化課 四季文化館みの～れ館長補佐・事業統括）
	＜昼食休憩＞	
13:00～13:45	プログラム(2) 釜ヶ崎芸術大学は誰もが表現者 ～社会包摂の表現の場づくりから地域へ～	講師：**上田 假奈代** （詩人、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表理事）
13:50～14:35	プログラム(3) 生きるためのそうぞうする力 ～地域社会に新しい変容を促す～	講師：**藤 浩志** （美術家、秋田市文化創造館 館長、秋田公立美術大学 教授）
14:45～16:00	プログラム(4)　クロストーク	講師・モデレーター 全員

＊ 申込方法は次のページをご覧ください ＊

参加申込（事前申込制）

● 申込期間： 2023年 10月3日(火)～定員に達し次第受付終了

● 申込方法：「申込に際しての確認事項」を必ずご確認の上、申込フォームに必要事項を入力し送信してください。

※**先着順での受付**です。お早めにお申し込みください。
※プログラム単位ではなく、**全体を通して**のご参加をお願いいたします。
※申込から3営業日内に、入力いただいたメールアドレスに返信いたします。
数日経っても返信がない場合はお手数ですがお問い合わせください。

＜申込に際しての確認事項＞

(1) 本講座は、全国アートマネジメント研修会の**オンライン配信講座の公開収録**です。
・**参加者の様子や発言がオンライン配信映像に含まれる場合がございます。**（※）
・**会場の中央に撮影機材を設置するため、講師やスクリーンが見えづらい場合がございます。**
以上の点にご了承の上お申し込みください。（※個人名・ご所属等を公開することはありません）

(2) 映像収録のほか、事業報告書作成のために録音及び写真撮影をいたします。

(3) 当該申込で取得した個人情報は、個人情報保護法の趣旨に則って取り扱うものとし、当協会が実施する他の事業の案内の目的で利用する場合があります。

● 申込フォーム： https://www.zenkoubun.jp/training/art.html

● お問合せ先：（公社）全国公立文化施設協会 ＜https://www.zenkoubun.jp/＞
全国アートマネジメント研修会担当
TEL:03-5565-3030　E-mail:art@zenkoubun.jp

令和５年度文化庁委託事業　劇場・音楽堂等基盤整備事業

全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会

ワークショップ１「次世代リーダー養成プログラム」

― 募集要項 ―

開催日時（２日間）
令和６年 ２月 １４日（水） 13：00 ～ 18：30（延長 19:30迄）
２月 １５日（木） 9：30 ～ 17：00

※２月５日(月)に、Zoomによる事前レクチャーを予定しております。
ご都合が悪く参加できない場合は、録画動画を受講前にご覧いただく形になります。

会　場　東京都中小企業会館 9階 講堂（東京都中央区銀座2-10-18）

参加費　無料

対象者　劇場・音楽堂等職員 経験５年～１０年未満の若手中堅職員の方

募集定員　２０名

講師 兼 モデレーター　柴田 英杞　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー

ファシリテーター
大久保 充代（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター
木全 義男　（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー
間瀬 勝一　（公社）全国公立文化施設協会 名誉アドバイザー
水戸 雅彦　（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター

◆ 講座概要 ◆

「将来、どのような劇場職員を目指したいのか」「自身のキャリア形成をどのように考えるのか。」若手中堅職員にとっては自身の人生設計に関わる重要なテーマです。本研修は、組織コミュニケーションという観点から、公立劇場におけるリーダーシップについて、望ましいリーダー像を議論し、将来自身がどのようなリーダーを目指すかを考えます。

また、真摯に自分と向き合うことで、自身のキャリア形成について考えるきっかけをつくります。単にリーダーシップ力を向上させるのではなく、若手中堅リーダーとしての自覚を喚起し、今後の劇場運営の糧となるような気づきの場とすることを目的とします。

ファシリテーターには、現職の館長を始め、館長職を経験したベテラン劇場人材が参加者の思いを受け止め、適切な助言アドバイスを行います。

― プログラムの内容（予定）―

（受講者決定後アンケートを実施し、内容を調整する予定です）

1日目
◆ リーダーシップを考えるための資源を引き出す
現行リーダー(館長、管理職、直属上司等)と職員の関係について
◆ レクチャー　リーダーシップ理論
◆ ワークショップ　リーダーシップを考える（リーダーシップ理論について意見交換）

2日目
◆ ワークショップ　リーダーシップを考える（公立劇場におけるリーダーシップについて）
◆ ワークショップ　望ましいリーダー像について
◆ ワークショップ　自分が目指すリーダー像を明らかにする
◆ 成果発表

申込方法　**受付期間：令和５年１１月１５日（水）～１２月２０日（水）【締切厳守】**

1．下記の申込書類（様式あり）を、メールでご提出ください。

① 受講申込書［様式１］
氏名・所属・連絡先のほか、質問事項にご回答ください。

② 所属長の推薦書［様式２］
勤務先の所属長（管理職以上の方）の推薦をいただいてください。

▼様式はこちらのページでダウンロードしてください。
https://www.zenkoubun.jp/arts_management/app/workshop01/

▼申込書類の提出先
件名を「ワークショップ申込」とし、メール添付でお送りください。
✉ art@zenkoubun.jp（全国アートマネジメント研修会担当宛て）

2. お申込から3営業日程度で、受付確認の返信をいたします。
＊ 数日経っても返信がない場合はお手数ですがお問い合わせください。

3. 申込多数の場合は、応募書類による選考をいたします。
＊ 選考にあたっては、地域性、施設特性、ジェンダーバランス、勤務年数などを加味して決定いたします。
＊ 結果は、１月中旬頃に申込者全員にメールで通知する予定です。

主　催　文化庁・公益社団法人全国公立文化施設協会

申込・お問合せ先　（公社）全国公立文化施設協会　全国アートマネジメント研修会担当
TEL: 03-5565-3030　E-mail: art@zenkoubun.jp

THE ASSOCIATION OF PUBLIC THEATERS AND HALLS IN JAPAN
公益社団法人全国公立文化施設協会

令和５年度文化庁委託事業　劇場・音楽堂等基盤整備事業

全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会

ワークショップ２『広報の考え方の基本』～ワークショップ

― 募集要項 ―

開催日時　令和６年２月 20日（火）　13時 ～ 17時（時間の詳細は後日決定）

会　場　東京都中小企業会館 9階 講堂（東京都中央区銀座2-10-18）

参加費　無料

対象者　劇場・音楽堂等に勤めている方で、現在、広報業務に携わっている方

募集定員　15名程度

講　師　**阿南 一徳（東京藝術大学 演奏藝術センター 准教授）**

◆ 講座概要 ◆

はじめに「広報の考え方の基本」についてお話しし、一方的なノウハウの伝達ではなく、各自の事情に応じた広報戦略を立案できるようになることを目指すワークショップです。

＊ワークショップの内容としては以下のようなもののいずれかを考えています。
（受講者決定後、内容を決定します）

・広報の資料作り実践　・ 広報の文章講座　・模擬プレゼンテーション（記者発表）
・チラシ、ポスターの制作シミュレーション　・キャッチコピーを書いてみよう　　など

申　込　**劇場・音楽堂等1施設につきその施設に所属する1名まで**

※ ご所属施設で申込者をご調整の上お申込みください。

※ なお、管理する劇場・音楽堂等からの申込者がいない場合に限り、指定管理者である団体の広報担当者は、1団体につき1名まで申込可とします。

申込方法　**受付期間：令和５年１２月４日（月）～ １２月２５日（月）**

申込フォームに必要事項を入力し、送信してください。

＊申込多数の場合は、抽選を実施いたします。結果は１月中旬までに申込者全員にメールで通知します。

＊フォーム送信後のメール返信はございません。
「お申込ありがとうございました」という画面が表示されれば、送信完了となります。

＊送信後に表示される「回答の PDF を印刷または入手する」から、申込内容の印刷が可能です。

▼申込フォームはこちらから
https://www.zenkoubun.jp/arts_management/app/workshop02/

主　催　文化庁・公益社団法人 全国公立文化施設協会

お問合せ先　公益社団法人 全国公立文化施設協会　全国アートマネジメント研修会担当
TEL: 03-5565-3030　E-mail: art@zenkoubun.jp

令和５年度文化庁委託事業
全国劇場・音楽堂等職員
アートマネジメント研修会　報告書

令和６年（2024年）３月発行

編 集 ・ 発 行　公益社団法人 全国公立文化施設協会
〒104-0061
東京都中央区銀座２丁目10番地18号 東京都中小企業会館４階
TEL：03-5565-3030　FAX：03-5565-3050
E-mail：bunka@zenkoubun.jp
ホームページ：https://www.zenkoubun.jp/

編 集 協 力　株式会社ぎょうせい